

会 議 記 録

次の審議会（協議会）を下記のとおり開催したので報告します。

審議会等名称	令和４年度 第２回近江八幡市総合教育会議		
開催日時	令和５年１月１８日（水） １４時００分 ～ １５時３０分		
開催場所	近江八幡市役所３階 市長応接室		
出席者 ※会長等◎ 副会長等○	出席者（敬称略） 市 長 小西 理（◎） 教育長 大喜多 悦子 教育長職務代理者 久家 昌代 教育委員会委員 安倍 映子、西田 佳成、大更 秀尚 ◇傍聴者 ０名		
次回開催予定日	未定		
問い合わせ先	所属名、担当者名 総合政策部企画課 今井 電話番号 0748-36-5527 メールアドレス 010202@city.omihachiman.lg.jp		
会議記録	発言記録 ・ 要約	要約 した 理由	内容を整理して、わかりやすく記録として残すため
内容	別紙のとおり		

担当課⇒総務課

事務局

1. 開会

市長

2. あいさつ

- 教育は30年40年後に成果が出る課題。明るい見通しを持つのが難しい現代だからこそ教育の力が必要。

事務局

3. 新任委員の紹介

事務局

4. 議題

(1) 第2期近江八幡市教育大綱の「19の施策」のうち、
施策3「不登校やいじめ・問題行動などへの取組や支援の充実」
施策16「子どもの育ちを支える親の学びや相談・支援体制の充実」
についての現状の共有と今後の取組について

- 事務局担当者より、議題について、資料①－1～②－4に基づき説明。
- 事務局の報告について意見がある方はご発言をお願いしたい。
- 自身も現場にいる頃は、不登校などの事例について保護者から相談があった時に教員だけではどうすればいいかわからないことも多くあった。そんな時に専門的な意見を聞ける存在として教育相談室やスクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーの存在はありがたかった。
- 一方で当時から気になっていたこととして、多数の支援機関がある中でそれらの連携が取れているのかというのは疑問だった。
- 市の教育相談室にも行ったことがあり、建物こそ冷たい雰囲気だが支援員の方たちがとてもあたたかく迎えてくださった。こうした支援員の力をもっと活用していかなければいけないと思うし、そのためには支援機関をまとめ、相談を受けて適切な機関に繋いでいくアドバイザーのような組織があるとより良いと思う。
- 様々な問題を抱えた家庭を支援する際には、問題の優先順位をつけて、たらいまわしにならないよう長期的に関わっていく必要がある。その時にアドバイザー拠点のようなものがあると良いと感じる。
- 的確なアセスメントがまずは一番に必要。
- 支援が分業になるとそれぞれの組織が十分に力を発揮できない。集合体として一つになって支援が出来たら最高の力が発揮される。現在の当市は良い相談・支援機関は複数あるが、その力が厳しい状況にある方に届

事務局

委員

委員

市長

- きにくい状況なのが課題と感じる。
- 自身が教育委員会にいた時に、他の教育機関の先生たちと同じフロアで働いていると、それぞれの課題が肌で感じられた。同じ問題に向かう課題についてはできるだけ一つの場所・一つの拠点に集めることが有効ではないか。
 - 教員の力の向上という意味では、課題発見能力が大事。課題にどれだけ気づけるか、そしてそれをどう表現し、行動に繋げていくかというところがもう一つ大きな課題になる。
 - 今の教育相談室は薄暗く怖いイメージがある。安心感のある相談業務体制を望みたい。
- 基本的な考え方から見直さなければいけない。まずひきこもりというのは「非社会行動」でも何でも無い。一番大事なのは何のため、誰のためにするのかというところ。例えば不登校の子どもに学校に行けと怒る保護者がいたとして、それがなぜ言うかということと自分のプライドを守るためだったりする。
- ヨーロッパの教育は何をしてはいけないということではなくて「自分たちに何ができるか」という権利を教える。
- 相談者の抱える問題が重いものになればなるほど、相対する人がどれだけ真剣に向き合えるかという話にしかない。その相談者と向き合う人がさらに専門的なことを相談する先として各専門機関はある。専門機関だけをそろえても問題は解決しない。
- 問題を抱えている人はそれを共有できる相手が必要。かつては地域や親族など社会自体に共有する力があつたが今はそれが無い。相談員がどれだけ共有できる相手になれるかが大事。
- 学校は学習する場である前に一つの居場所でもある。地域の力が弱まり、家族も核家族化する中で学校しか居場所がないという子もいて、それが学校に行きたくないとすると居場所がなくなってしまう。
- その中で行政として子どもたちを主体に据えて何ができるかを考えていかなければならない。

教育長

- 居場所としての学校の役割は本当に大事だと思う。コロナ禍や一人一台端末の整備などもあり、学校に行かなくても良いという考え方が広がっている。それは子どもにとって安心感にも繋がるが、一方で学校の良さを感じられない子どもが増えているのかなと感じている。
- もう少し学校に許容の文化があってもいいのかなと思う。今の学校の環境というのはしんどい部分もあるのかもしれない。

委 員	● 様々な要因で学校に行けない、教室に入れないという子がいて、そういう子どもがここに行けば悩みを話せる、少しでも楽になれるという安心感を持てる支援が必要。 ● 現状は相談窓口もいくつもあって場所もそれぞれ違うとなるとそれぞれが十分に機能していないのではないかと思います。一つの敷地、一つの建物の中で相談できる体制にしていくのが大事だと思った。
委 員	● 複雑化した社会で様々な情報にさらされる中で生きている今の子どもたちは本当に大変だと思うし、不登校が増えるのも仕方ないのかなと思う。学校がすべてではないというのもその通りだと思うが、やはり多くの人と関わりながら同じ場所で過ごすということは必要な経験だと思う。不登校になってしまっている子にもそういう場所が必要だと思うし、前向きな気持ちになれる温かみのある場所があればいいと思う。
事 務 局	● 色々な意見をいただき感謝する。 ● 不登校傾向の子をどう社会に交われるように支援できるかということを考えると、今やっていることをそのまま続けるのではなく、人と関わる新たな取組というものが必要かなと思っている。 ● 教育相談の現場は一人一人の子どもと丁寧に向き合っていくことと子どもを支える保護者を支えることが大事だと思っている。委員の皆様の意見を受けて考えることはたくさんあるなと感じた。
教 育 長	● 教育相談室ではお菓子作りで集まるなど利用のハードルを下げる工夫をしている。そういうことも大事。
市 長	● 住宅街の中に普通の家のような場所を設けて教育相談をすればいい。とても行きやすくなると思う。
委 員	● 一つ一つの施設はとても充実している。普通の家でというのは環境面でいいと思うが、まずは相談窓口が分散している状況を一つにしていく必要があるのではないかな。
市長	● 一つの窓口ですべてができないことが問題ではない。メインで対応し、伴走できる人が一人いて、その一人が各専門の窓口で相談しながら対応すればいい。それなら相談窓口が一か所に固まっている必要はないと思う。例えば市民課の窓口で保険のことを聞かれたとしたら、その人が保険のことを教えればいい。それがあちらに行ってくださいと言うからおかしな話になる。

委 員	● 行政側が動いて相談者は動かないという方法を言っておられるのか。
市 長	● 学校の先生のように、相談者に相対する人は一人がいい。専門の窓口はバックヤードとして、相対している人がその都度相談するというものでいいので、窓口をまとめるという必要はない。
委 員	● 行かないと支援が受けられないということもあると思うので、あっちにもこっちにも行かないといけないという話になる。それは相談者にとって負担。
市 長	● ここに行けって言うことがおかしい。「担当営業」のような人が一人ついていればいい。 ● その人が間に入ることで、窓口が変わると一から説明しなおさなければいけないというストレスがなくなる。
委 員	● アドバイザーのような人が一人いてその人が「この話ならここですよ」ということを教えながら、一緒にその場所に行くということか。
市 長	● 一緒に行くというよりはアドバイザーがその場で専門の窓口に聞く。もし聞くだけでは難しいことなら窓口の方に来てもらう。専門性を持った人がその場に来ればいいだけで、組織としてという話ではない。こういう問題は場所と組織だけで解決できるものではないと考えている。
教 育 長	● アドバイザーとして伴走できる人がどれだけいるかが疑問。
市 長	● だれが伴走するのかというのは確かに問題。 ● 保護司のように、一人が何人かの相談者を担当するという形で。テーマではなく人につくようにするといい。
委 員	● アドバイザー的な人が必要であることはよくわかる。
教 育 長	● それだけの人材をそろえられるかが疑問。
市 長	● 入り口のところをどう組織していくかというのは確かに課題。 ● 属人的な問題で、やはり信頼できる人間だからしゃべれるというところはある。例えば窓口が5つあり5人の人と相談したとして、そのうち一人とでもうまくいかなかったら、相談者の気持ちが萎えてしまう。

教 育 長	● 属人的と言われたが、それこそ難しい。それだけ力のある人をそろえないといけない。
市 長	● 難しいけどそれをどうすればできるか、できないならどうカバーするかという考え方が前提になる。一か所に集まれば解決するというものではないと考えている。
委 員	● 問題が重複している家庭にとっては、複数の窓口相談するというのは難しいのかなと思う。 ● 問題解決に向けて方向付ける存在としてアドバイザーを拠点に 1 人置くというのは大事なことだと思う。
市 長	● どこに行くからダメというよりは話す人が変わることこそ相談者が不安に思う原因。
教 育 長	● 子ども家庭相談室などでも今一人で何人かを担当するという形で動いているが、相談件数が多すぎてなかなか解決しない。そうした人の不足をどうすればいいか。
市 長	● 問題の重要度によって階層分けし、重要度の高い問題を抱えた人に重点的に支援すると良いのではないかな。
委 員	● 例えば客観的にみると支援が必要なのに保護者にその自覚がなく支援が届かない人がある。そういうケースはどうすればいいか。
市 長	● じっくり話して関わっていくしかない。多くの人に関わる中でだれかその人が信頼できる人が見つければいい。
教 育 長	● 言われることはわかるが、常に寄り添って伴走できる人が何人いるかという点が問題。
市 長	● 今までは地域の方や親類の方で寄り添ってくれる人がいることも多かった。今はそういう人もいなくなっている。
委 員	● 保護者の方が大変な時でなかなか支援を求められないときは、必要な支援を進めていくのは時間がかかる。
市 長	● 直接話すことで何とか支援に繋げるしかない。

委 員

- 相談窓口を一か所に集めた方が良い理由があるとしたら、サービスの提供側が意見交換する場としては意義がある。

市 長

- 課題共有がしやすくなるということか。
- 個別の課題共有というよりは一般的な意味でお互いこれからどうやって支援を組み立てようかということ話す場があると良い。
- 学校現場も教室ばかりでなく子どもたち同士お茶を飲みながら話すようなスペースがあってもよいのではないか。

教 育 長

- 子どもたちがというのは難しいかもしれないが、教員の働き方としても職員室内に教員同士が話せる空間があった方が良くとも言われている。

市 長

- お菓子バーなどがあってもよい。そうするとなぜ先生だけという話になるかもしれないが。

委 員

- 確かにそうした教職員間の交流も年々なくなっている。

教 育 長

- 学校という場所自体もっと失敗を認められる場所になってほしい。失敗は恥ずかしいものという意識が強いと思う。

委 員

- 社会が変わっているのに昔のかたくなな考えを持っている部分はあるかもしれない。もっと柔軟性を持っていきたい。

市 長

- 子どもたちはいろんなことを聞きたいと思っている。聞ける相手と場所を用意することが大事。今はすごく授業重視で先生が指導するのが基本になってしまっている。

教 育 長

- 学校も教える場ではなく学ぶ場にならないといけない。

事 務 局

- 本日の議題は以上となる。活発な議論が行われたことに感謝する。
- 今年度の総合教育会議は今回が最後になる。次回開催日等については、未定。委員の皆様より議題等のご意見あればいただきたい。

事 務 局

閉会

終了 15 時 30 分